

○二つのドクウツギ型の分布の例 (前川文夫) Fumio MAEKAWA: *Scirpus americanus* complex and *Oxalis corniculata* complex as the presumable examples for *Coriaria*-type distribution

近着の雑誌でドクウツギ型を暗示する二例に気づいた。一つは小山鉄夫君が *Canadian Journ. Bot.* **41**: 1107—1131 (1963, Jul.) に出した *Scirpus* sect. *Pterolepis* の論文で、その中の *Scirpus americanus* は 2 つの亜種を持つが丁度 L という字を二つその足を背中合せに **ロロ** にとじつけたように西は西濠州から南米、北米をへて中部欧州にまで分布している。北米から、南米の間が丁度とじ合せにあたる。普通かんたんに分布し易いと思われているこの類がこういふ変わった分布を固持しているとは思いがけなかっただけにその地史的意義が注目される。私にはどうもドクウツギの示した赤道に沿った地帯での残留者を思わせる。またブラジルの Eiten 氏は *Amer. Midl. Natur.* **69**: 257—309 (1963) にあの雑草であるカタバミを中心にした一群 (Sect. *Gorniculatae*) の分類を再検討している。この類は大部分が中米から南米、ことにアンデス山中に細かく分化しているのにカタバミだけが東南アジアから北濠州へかけての熱帯の林内に自生がある。しかし温帯的なところはすべて人為的に持ち込まれたものである。そこでこの群の分布の範囲もまたドクウツギ型であることになる。*Scirpus* にしても *Oxalis* にしてもいわゆる雑草であってその分布については充分に吟味しなくてはならぬが、一方ではこういふ種類でさえも方法をうまく当てはめれば十分資料に耐えうるということがわかったことは、新たな収獲であった。

(東京大学理学部植物学教室)

○新旧二つのとびこえ型分布 (前川文夫) Fumio MAEKAWA: The over-Japan Sea distribution, old and young

主に本州中部の植物で日本海を距てた対岸及びその背後地との間に隔離分布があることはよく知られている。私はそれをとびこえ型分布と呼んでいるが、この頃気がついて来たことは、これに古い分布と新しい分布があると思われることである。新しい分布はまだ地史的時間が経っていないので隔離の効果が現われず同一種に属している段階である。これに対してより古い方は、恐らくは鮮新世に入るかと思われるが、主に古い山地に残り、物によっては変種に、さらに種を異にする段階にまで進化している。恐らくは大陸方面における母集団から少くとも二回にわたる進入分布の結果が残ったもので、古い方のとびこえでは必ずしも今の形の日本海を越したという形式ではないかも知れない。一つの属内にこれが出現するよい例を 2 つ本誌にてた論文から拾ってみると、一つは豊国秀夫氏が **36**: 24-1 (1961) で扱ったヒナリンドウ (*Gentiana aquatica* L.) が新型、コヒナリンドウ (*G. laeviuscula* Toyokuni) が古型で赤石山脈に産する。

第二の例は北川政夫氏 **38**: 304-5 (1963) のキンミズヒキ類である。チョウセンミズヒキ (*A. coreana* Nakai) は新型。ヒメキンミズヒキ (*A. nipponica* Koidz.) は古型であろう。普通のキンミズヒキ (*A. pilosa* Ledeb.) はこれに反して存外若い史前帰化植物と思う。従来知られたとびこえ型のうち、ケショウヤナギ、シャジクソウ、アサマフウロ、ツキヌキソウは新型、ウメウツギ、タデスミレは古型であろう。